

早稲田文学
新人賞決定!?

早稲田文学 フリーペーパー

こどもWB

西原理恵子×重松清
「男の子ってなんてバカ」



透明な手

村田沙耶香

給食を食べ終わった恵理は、プールの更衣室と学校のフェンスの間にある隙間に入りこんだ。腰の近くまで生えている雑草にふくらはぎをくすぐられながら進み、プールの辺りまで来るとやっと足を止めて息をついた。グラウンドの方から、大勢で遊ぶ子供達の笑い声や、ボールを蹴る音が微かに聞こえていた。

五年生になってから、十五分の短い休憩はトイレの個室に、昼休みはここに隠れて時間が過ぎるのを待つことにしていた。休み時間なんてなければいいのにといつも思う。雑草だらけのこの隙間は人一人通るのがやっとで、誰もこんなところまではやってこないと思うが、不意に先生が見回りにでも来たらと思うと、気が気ではない。

そのとき、恵理のすぐ隣で小さな溜息が聞こえた。横を向かなくても、それが誰なのか恵理にはわかっていった。横を向

「昼休みって、ほんとに長いね」

ソラオの声に、「うん」と恵理は頷いた。ソラオはまた小さく溜息をついた。

「このフェンスって、登ったらすぐに乗り越えられるよね。どうしてあっち側に行かないの？」

「現実の人間には、やっちゃいけないことがたくさんあるんだよ」

彼の方を見ないまま、膝の裏をくすぐる草を手で払いながら

「ふうん」

「ソラオってさあ、きつとそろそろいなくなるんだろね」
「最初からいないんだよ、僕は空想上の友達だから。僕と喋ると、むなしい？」

「すこし。私、もう、前ほど君のことよく見えないし」

「うん、僕の身体、なんかぼんやりしてるよ」

「私も大人になってきたんだよ。そろそろ初潮もきそうだしね」

「そっか。生身の身体って、生々しいんだねえ」

「うん、早く、来ないかな、初潮。出てきたときにまだソラオがいたら、見せてあげるね」

「恵理は僕には変なことばかり言うくせに、教室では押し黙ってるんだよね。友達がいないから僕を代用品にしているんだなあ」

「空想上の友達って、デリカシーがあるものだと思うってけど、ソラオは全然ないんだね」

「それはたぶん、もう僕が消えかけてるせいだよ。ほら、手がこんなに透けてるでしょ」

ソラオは手をこちらにかざした。その手はすっかりぼやけていて、向こう側が透けて見えた。

それを見ながら、恵理は、きつとそろそろ潮時なのだろうなあと思った。ソラオの透けた体の向こうに、フェンスのあ

ちら側の街並みが見えていた。びっしりと立ち並ぶ白いマンションや灰色のビルたちを、恵理はぼんやりと見つめていた。

恵理は目覚ましを止めて起き上がった。今日は土曜日で会社は休みだというのに、昨日、居酒屋で同僚と飲んで酔っ払って帰ってきた際に、いつもの癖で目覚ましをかけてしまっていたらしい。二度寝しようかとも思ったが、妙に頭が冴えてしまっていた。伸びをすると恵理は立ち上がり、冷蔵庫へ行って冷たいミネラルウォーターを取り出し、コップに注いだ。軽い二日酔いだが、軽いものなら食べられそうだった。

恵理はトーストを焼くと、部屋の中央の小さなテーブルへ置いた。何もつけずにパンにかじりつきながら、恵理は呟いた。

「あんたって、一体、いついなくなるんだろね」

恵理の正面で見えないトーストに手を伸ばしていたソラオが首をかしげた。

「わかんない。てつきり、恵理が大人になったら消えるものだと思うってただけ」

「だって、あたし、もう三十二だよ」

恵理はそういうと、冷えたミネラルウォーターを飲み込んだ。ソラオが肩をすくめる。

「今日消えるだろう、今日消えるだろうと毎日思ってるんだけど、いつのまにかそのまま二十年以上たっちゃったねえ」

「あたし、今は、たくさん友達いるし、彼氏もいるし、楽しく過ごしてるのに。でも消えないんだね、キミ」

「どうして消せないの？」

「だって、自然に見えてくるんだもの」

恵理はそういい、パンの耳を口に押し込んだ。しばらく考え込んで、小さく呟く。

「ひょっとしたら、空想上の友達は大人になったら消えるっていうのは嘘で、皆言わないだけで、誰でも見えない友達と一緒に暮らしてるのかな」

「そうかもねえ」

「なんか、それって、気持ち悪いね」

「かもしれないけど、恵理にだけは言われたくないだろうなあ」
ソラオは食べるのが遅い。恵理がもうほとんど食べ終えて

いるのに、まだ耳しか食べていない。小さく千切った破片をいつまでも噛んでいる。そんな様子まで、恵理には細かく見えるようになっていた。

子供の頃に比べて、ソラオは恐ろしく鮮やかさを増して来ている。透けていた手も、今では洋服の皺まではっきりと見える。ソラオの口の中でパンの耳が唾液と混ざる音も、小さなげっ歯類の音も、しっかりと聞き取れてしまう。

恵理は小さな頃、現実と空想は相反するものだと思っていた。けれど、現実を吸い取ってどんどん鮮やかさを増していくソラオと暮らしていると、そうは思えないようになっていた。

「あ、電話だ」

着信音が響き、恵理はコップを置いて急いで携帯をとった。電話は恋人からで、今日、これから家に来ないかという誘いだった。

「よし、そろそろ行こうかな」

身支度を終えると恵理は立ち上がった。いつの間にか食事を終えたソラオも、当然のように恵理の後ろをついてきた。ソラオは水虫にかかりかけていて、靴を履く前に玄関で小指をこする。その仕草を横目で見ながら、恵理はサンダルを履いてドアを開き、日差しに目を細めながら外へと歩み出た。

恋人の家は恵理の家から電車で二駅のところにあつた。恋人は恵理を部屋に招きいれると、

「前から見たいって言った映画、さっき借りてきたんだ」

と言ってプレイヤーにDVDをセットした。恵理と恋人は部屋を薄暗くして映画を見始めた。しばらくして、「これつままないね。失敗した」と恋人が呟き、恵理も苦笑いをし、頷いた。ふと横を見ると、ソラオはベッドに座って真剣に映画を見詰めていた。時折前髪を撫む仕草は、大学生のころ付き合っていた恋人の癖を、ソラオが吸い取ったものだ。ソラオは恵理の会おう人間達の細かい仕草や言葉遣い、皮膚の感触や呼吸の生ぬるさなどを、どんどん吸収して成長してい

るのだつた。

これからいつも通り恋人と恵理がセックスを始めても、ソラオはそうして部屋の中に座っているだろう。高校のころ、付き合ったばかりの先輩の部屋で初めてしたときもそうだった。薄暗い部屋の中で、ソラオはずっと恵理の右手を握ってくれていた。その様子が妻の出産を励ます夫のようで、恵理は思わず噴き出してしまい、どうしたの、と目を見開く先輩に、「くすぐりたい」と言っていてごまかした。

画面の中では、外国の小さな男の子と女の子が、手を繋いで歩いていた。その手が、昔見たソラオの透明な手のひらと重なった。あの時消えかけていたソラオは、ひよつとしたら恵理と一緒に消えかけていたのかもしれない。今では、ソラオは現実の人間より鮮やかに見えるほどだった。

やがて映画が終わり、音楽が流れ出すと同時に、ゆっくりと恋人の顔が近づいてきた。恵理は薄目を開けていた。恋人の顔の向こうに、ソラオが見える。ソラオは特に気にする様子もなく、ベッドサイドに転がる恋人の煙草を興味深げに眺めまわしていた。その横顔の目尻にうっすらと、できかけの皺が見えた。

ふと、目玉を動かして恋人の顔を見ると、恋人も薄く目を開いていた。しかしこちらを見てはいないようだった。

その視線の向こう側に、もし恋人の「見えない友達」がいるなら紹介して欲しいと恵理は思った。そしたら、四人ですつと一緒に暮らしていこうと、三人に提案しよう。そんなことを考えながら、恵理は薄く開けていた目をゆっくりと閉じていった。視界が暗闇に包まれようとした瞬間、瞼の隙間から、ソラオがこちらを見て、一瞬、微笑んだような気がした。

〈了〉

村田沙耶香 Murata Sayaka

79年生。やわらかなかにも不穏さのまじった、心ざわつく作風が持ち味。ベッドタウンに暮らす少女の息苦しさや成長を描いた『マウス』を経て、『ギンイロノウタ』、『星が吸う水』で、その不穏さと魅力はより色を濃くしている。

講談社◆話題の文芸書

宮本輝

現代人の魂の底に響きわたる
「生きる」意味を問う感動の巨編!

骸骨ビル^{じゅうぞう}の庭

平成六年、大阪・十三。八木沢はビルの管理人として着任した。
ここは、戦後復員した阿部と茂木が、戦争孤児たちを育てた場所である。
かつての孤児たちと老いた育ての親の人生の軌跡、
断ち切れぬ絆が、八木沢の日記からよみがえる。 定価各1,575円(税込)

上下



ISBN(上)978-4-06-215531-1
(下)978-4-06-215532-8

創業100周年
講談社
〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

第23回早稲田文学新人賞選考会レポート

選考委員・東浩紀……で、どうでしょう。候補作十四本、

それにもういちど捨てるのがないかと残りもひとつお見ただけでも……最初に名前の挙がった「懐妊祝い」かな。でもこんな呪詛の文学を東浩紀が新人賞に通したら、みんな「どうしたのか」と思うかも。いや、おれが出しちゃうと言えは出しちゃうのかな(笑)。あるいは「これとほかの」と言えは出しちゃうのかな(笑)。あるいは「これとほかの」と言えは出しちゃうのかな(笑)。あるいは「これとほかの」と言えは出しちゃうのかな(笑)。

いまの文学をトータルで眺めたとき、新人賞としては分裂せざるを得なかった。しかし……

東●かといって全部佳作にじゃあなくて、誰も載らなへんって読者も応募者もみな不幸でしょう。十時間シンポ以来、早稲田文学はさまざまな文学の可能性を引き受けていくことを使命とした。その宣言として、今回はあつち違うものを選んでみました。みたいな感じ、いけないかな(笑)。

東●選りきれない感がありますよ。

東●事実、選びきれない。理屈はいくらでもつくけど、「いまの文学をトータルで眺めたとき、新人賞としては分裂せざるを得なかった。しかし、これは決してわれわれの怠惰ではなく、いまの文学のシーンが抱えている分裂と言ったことができないだろうか」とか(笑)。

東●決定的な作品がないことに、われわれが戸惑いを覚えたなかつたと言えは嘘になる。そのようなことを含めて、次回は意欲的な作品を望みたいとか……。しかし、それじゃあ選考委員の役目は果たしてないよねえ。「なんなんだ、こいつ」と。じつは今日ほか「好きかもよ」と言ったのは、ケータイ小説みたいな「喪失の音」だけだったよな気がする。

東●「ほへの罪難をせよ」といって残らなへん、東華で復活したヤツですよ。じゃあ「その首」にしますか。「ひとり選考委員」の意味は、議論尽くした末に行われた選考委員の決定は絶対であることにあるか。

東●でも、ああいうのは泣けななきや意味がない。そこが「まひ」と弱いのよね。方向性は合ってるんだから、渾身の「撃て、もっと泣けるやつ」を一本送りたいよ。

東●「早稲田文学新人賞はサスペンドされるわけ？」しかも、最終選考から三人なんだけど、敗者復活的に、突然ケータイ小説っぽい女の子が立ち現れた、と。ストーリーとしてはおもしろいかなあ……。

東●「早稲田文学新人賞にはある」と(笑)。

東●でもなんか、それと「最終候補二本」みたいな感じはすね。結局せんせん違う作風なかで決め手になるほど圧倒的なものがない、こつこつとこつこつと。

早稲田文学新人賞、延長戦突入

- 懐妊祝い 西河真功
- ほかぬいと 小説北海道製作委員会
- パンダに恋をする 則武陸末
- 喪失の音 柚子と樹里

wasedabungaku

早稲田文学

発行・早稲田文学会 予価 980円

さらに！

ふろくつき！

2009年、残暑のうちに発売予定

第23回早稲田文学新人賞

選考委員 東浩紀

重松清・西原理恵子・金原瑞人・斎藤美奈子・斎藤環・千野帽子

川上未映子・中村文則・村田沙耶香
田中りえ・石川義正・大杉重男・木下古栗

and more!

10月まで残暑、

埼玉県熊谷市など、全国2カ所まで40.9度を観測、国内最高気温を74年ぶりと異なるなど、秋の気配を期待したが、残暑はまだ続き、見込み。秋らしい秋を感じないらしい秋を感じる可能性も。日本も、厳冬に突入する可能性も。四季が薄れゆく、どうやら今年の猛暑を引き起こした「二一ニヤ現象」という暖化の原因が、うだ。

ある日突然、うちのクラスにだけ増えたものがある。なまあたにかい陽のさす、木曜の四時間目。そこに設けられた読書のお時間というものに、あたしはずいぶん悩んでいた。

その時がくると、クラスじゅうがしっと息を殺すのがわかる。そうして作られた沈黙を踏みこめるように、そのひとは引き戸の隙間から、するりと入ってくる。上品なブリルが縁どるシャツにふんわりと広がる黒のスカート。清潔だけどもどことなく古くさい。まさにそういうことばがびつたり、そのおんなの名を美袋という。

この、美袋先生というのが、あたしたちの読書の先生なのである。

こんにちは。美袋です。私は今日、懐かしい本を読むことにしました。さ、ご本を読みましょう。

ふつうなら、お砂糖ひと匙ぶんくらいしか話さない、野暮ったい若い女の先生というものは、もうちよつと紙められてもいいはずだった。まして美袋先生の場合、職員室に机もなければおまそ先生らしいこともしない。なのに美袋先生は、教室の真ん前で本を読むだけで、魔法のように教室を従えた。そう。美袋先生は何もしない。ただ、本を読んでいるだけ。本を読む美袋先生の周りには、しじまがある。山奥にある古びた校舎のおいをぎゅつと閉じ込めたような。けれども新しいような。

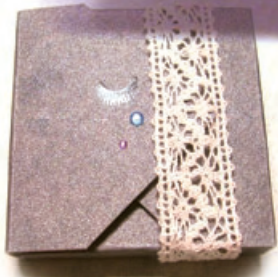
チャイムが鳴る数瞬間に、美袋先生は本を閉じる。

そっけなく立ち去る背中へ向けて、それは静かにさしのべられた。目のしろい部分がはっとするほど着目している、新の、まなざし。黒い縁どりの眼鏡の奥は古びたにおいに沈んでいる。

新の視線をなぞるように、華奢な背中を教室じゅうの目がらんらんと追う。あたしだけが苦い。

美袋先生のことばがやわらかく耳を刺して、ひっかかっていた。

学級文庫に本を足しておきました。放課後に、見てみてくださいね。



放課後 学級文庫

①泣かない人魚姫

nanakikae

本好きがこうじて手製本やブックカバーまで自作してしまう「文学少女」。ブログ日記「日々は読書 (<http://gosui.exblog.jp/>)」が人気を博し、「彷彿月刊」で連載を持ちつつ、風呂敷に教科書や本を包んで学校や図書館通い。永遠の愛読書は『崖の館』(佐々木丸美)、『自負と偏見』(オースティン)。

教室は鈍い橙色のなかに沈んでいる。委員会帰りのあたしのほかには誰もいない。

鞆を取り出して何気なく見やった窓辺に、それはひそやかに佇んでいた。本だ。それも、函入りの。

おそるおそる指の腹で触れた函は、深いにびいろをしている。レースのリップンをはずすと、ふんわりとそれは広がった。花卉がほころぶのを思い浮かべたのは一瞬で、それはすぐにつばさをひろげた鳥のかたちになる。そのお腹のあたりに抱かれている、四角い本。深い青の表紙をめくると、淡い色の紙に、銀色の箔が押されている。右の頁には数字が刻され、左の頁には何を描いたものかようよう判じることのできない絵が、四角く切り取られていた。

泣かない人魚姫、ね。

函の側面に貼られているのが、どうやらこの本の名前らしかった。

悲劇のヒロイン、というかんじの人魚姫の頭に、悲しみを打ち消すようについていることば。泣くことができないんじゃない。あえて泣かないお姫様。本文がないのに挿絵だけあってもわからない。どんなお話なんだろう。

蛇腹になった頁に指をさし入れると、表紙がめくれてぐるりと反った。ゆわしたのかと、思った。制服の下で肌が冷える。は、と息を吐いてまじまじと本を見ると、表紙は包んであるだけだった。好奇心で覗いた頁の裏には、星がはしっている。まるで、そこに物語を書きこまれるのを待っているみたいに整然と。罫を作るようにして。

息を止める。

ふだんなら、絶対にそんなこと、しやしないのに。

本にものを書き込むことなんて、本を踏むのとおんなじくらい罪深い。

けれどもあたしの手は鞆の中をまさぐって、ペンケースを見つげ出す。

どうしよう。

(あたし、すごく楽しい)

だってこんなに、お話を待っている。

美袋先生の白い顔が一瞬目の前をよぎった。紙に鉛筆の先がふれる、ざりりとした感触が胸を撫ぜる。薄い膜をおそるおそるついはむように。あたしは手を動かしながら、恐ろしいのに素敵な何かがゆるやかに満ちていくのを黙って、見ていた。

フリーペーパーなんだから、
街へ出てゲットしろ、
もしくは郵送で送ってもらえ、
俺の文章はデータじゃねえよ。

(※編集部注…モブ・ノリオ氏の「yama」より引用)

…という著者の意向により、「絶対兵役拒否宣言」は紙版でのみ掲載しております。

最新刊

黄金の枝を求めて

ヨーロッパ思索の旅 反戦の芸術と文学
立野正裕著 3500円＋税

なんのために若者たちは
死ななくてはならなかったのか

ベルギーやフランスに点在する第一次大戦期のお
びただしい戦跡や墓地を訪れ、サスンや、オー
ウェンや、マクレーらい
わゆる「戦争詩人」の仕
事とその現代的意義につ
いて思索を重ねる。反戦
と非暴力主義の可能性を
探る探求としての紀行。



●新装復刻版

戦後日本労働運動史

①②③④⑤ 全6冊完結

海野幸隆／小林英男／芝寛 編 各1800円＋税

いまさらいうまでもなく、日本労働運動は資本攻
勢に押されっぱなしで目をおおっばり現状
にあります。この危機を見据え、労働者階級の未来
を展望するためには、階級的視点を堅持し、国際的
に視野をひろげながら、過去われわれの先輩がい
かに闘い、勝利し、敗北したのかを検証する作業が
不可欠です。戦後史の学習・研究に必読の書。

●21世紀最初のプロレタリア詩集 悪い詩集

——又は詩的唯物論真髓の大盛

安里叫龍 (Asato Miroku) 著 2666円＋税

……吉増剛造がそれをよく持続していることにつ
いては、先に触れた。しかしそれが現代詩の「美学
的」磁場に回収されないためには、何かが必要で
ある。たとえば、吉増の詩を安里健の「悪い詩集
又は詩的唯物論真髓の大盛」とともに読むこと
によって、それは、かろうじて見出せるものかもしれ
ない。……

(経秀実著「増補新版 詩的モダンニツイの舞台」呪わ
れた詩人」とその後——一九六八年の詩人たち」より)

スペース伽耶

〒113 東京都文京区本郷三の二九の一〇 飯島ビル二階
☎〇三(五八〇)三三〇五 FAX〇三(五八〇)三三〇六
E-mail skaya@cooemail.ne.jp

旧作異聞

18



『坊っちゃん』
(新潮文庫)



斎藤美奈子
Saito Minako

56年生。94年、『妊娠小説』で評論活動を始める。古典とベストセラー、時事問題からマンガ・アニメまで、題材の硬軟を問わず舌鋒鋭く論じる著作には、読者の物の見方をひっくり返す「目からウロコ」が満載。「文芸春秋」「本の森」など。

文学が「読む」ためだけにあると思ったら大まちがい。文学は地域の宝。特定の作家や作品が地域振興に貢献している例は少なくない。

たとえば愛媛県松山市は「坊っちゃん」の町である。坊っちゃん列車が市中を走り、名菓といえは坊っちゃん団子、野球場は坊っちゃんスタジアム、坊っちゃん文学賞と称する新人文学賞まである。

それほど厚遇されているのに、本家本元の夏目漱石『坊っちゃん』で松山がさんさん書かれ方をしているのはよく知られた話である。

汽船で港に着くや否や「野蛮な所だ」(気の利かぬ田舎ものだ)と当地の人々を酷評し、ことあるごとに「田舎」「田舎」と連発し、列車に乗れば「マッチ箱のような汽車だ」、看板に東京と書かれた蕎麦屋に入れば「東京と断わる以上はもう少し奇麗にしそうなものだが、東京を知らないのか、金がないのか、滅法きたない」。

町自体に対する評価も当然いいわけがなく、「県庁も見た。古い前世紀の建築である。兵営も見た。麻布の聯隊より立派でない。大通りも見えた。神楽坂を半分にした位な道幅で町並はあれより落ちる。二十五万石の城下だって高の知れたものだ。こんな所に住んで御城下などと威張っている人間は可哀想なものだ」。

そして清への手紙に彼は書く。「きのう着いた。つまらん所だ」

きわめつけは、彼がこの土地を離れる際の一文だろう。

「その夜おれと山嵐はこの不浄な地を離れた。(略)新橋に着いた時は、漸く娑婆へ出た様な気がした」

そもそも『坊っちゃん』に松山という地名は出てこない。(四国辺のある中学校)とあるだけだ。だけなんだが、もしこれ松山の話なら、松山は完全にバカにされているのである。唯一評価されているのが作中では「住田の温泉」と呼ばれる道後温泉で、ここだけは「ほかの所は何を見ても東京の足元にも及ばないが温泉だけは立派なものだ」と書かれているが、それにしたって「不浄な地」だよ。

こんな作品を観光の目玉にするなんて、松山の人々は鷹揚なのか鈍感なのか、それとも『坊っちゃん』自体を讀んでいないのだろうか。

その可能性は捨てきれない。なにしろ松山では顔出し看板も坊っちゃんとマドンナ。観光ガイドなのか、休日の観光地にはコスプレ姿の坊っちゃん(風の男性)と袴をはいたマドンナ(風の女性)がペアで歩いていたりする。マドンナはうらなりの婚約者だったはずだが、ここでは完全にカップル扱い。物語内容が知られていない証拠である。

とは申せ、このズレ方、ピントの外れ方こそ観光文学の醍醐味。『坊っちゃん』は田舎差別と松山への侮蔑に満ちた小説だと本気で怒る人たちもいるようだが、ここで怒ったらそれこそ「田舎者」である。どこぞの文豪がおぞましい賞賛をおくってくれたところ、何の価値があろう。酷評されているからこそおもしろい、そう考えるのが文学ファンの正しい態度であり、松山市の観光政策もズレてはいるが、まちがってはいないのだ。彦根の「ひこにゃん」から奈良の「せんとうくん」まで、ご当地キャラの普及に躍起になっている昨今の地方自治体を見れば、漱石はよくぞ『坊っちゃん』を書いてくれたと考えるべきだろう。

松山市にはしかし、最近不穏な動きが目立つ。だれかが余計なご注進でもしたのだろうか。「坂の上の雲」から司馬遼太郎『坂の上の雲』へ移そうとする動きが見えるのだ。『坂の上の雲』の主人公・秋山好古と秋山真之兄弟が松山市の出身であるというのがその理由だが、この宗旨替えは単に作品Aから作品Bへの転換を意味しない。日露戦争で武名を上げた軍人である秋山兄弟。対する漱石は日露戦争に否定的だった。坊っちゃん

と山嵐が学校を去る原因となった師範学校の生徒との乱闘が日露戦争の祝勝会の日であったのも、ある意味象徴的である。

『坂の上の雲』への鞭替えには、思想的・政治的な意図さえ感じる。松山市よ、ピント外れな「坊っちゃん」よ永遠に、と願わずにはいられない。

Waseda Bungaku Free Paper

WB vol.17

2009年7月31日発行(年4回刊)

Published by 大日方純夫
Edited by 芳川泰久 (Editor in Chief)

近藤景亮 青山南
西條弓子 貝澤哉
横山絢音 十重田裕一
立花聡子 三田誠広
山本浩司

市川真人 (Concept & Direction)
八巻和弘
和野潤

Photograph 篠山紀信 p01
Illustration 西原理恵子 p16
Design 奥定泰之 momoko

編集・発行 早稲田文学会 / 早稲田文学編集室
162-0042 東京都新宿区早稲田町27-1F
TEL/FAX 03-3200-7960
Mail wbinfo@bungaku.net
http://www.bungaku.net/wasebun/

印刷 凸版印刷株式会社
112-8531 東京都文京区水道1-3-3
TEL 03-5840-4845 FAX 03-5840-1676
http://www.toppan.co.jp/

▼子どもでたのしめるWBをつくることにしたからおまんが
つくれといわれたので、がんばった。でも子どもでんでんぼなん
だらう?さばらさいこ。「ぼくってなんてバカ」みたいなのをか
けといわれた。バカのふりはむずくてなやむ。おとなはひどい。し
んれんさいもりだくさんのこどもWBはまだまだつづくよ。K

▼西原理恵子さん原作『女の子のたたり』は8/29から上映開始。
新人賞は延長戦ですが「こどもWB」もこれから試合開始。新企画
も含め、従来以上に多くの方にご参加いただければ幸いです。配布
設置に協力頂ける方も上記編集室までご連絡願います。ic

Web上で閲覧できる電子ブック

ばらっと

読める!
めくれる!
検索できる!

早稲田文学 ばらっと

WBのバックナンバーは「ばらっと」で検索・閲覧!

東京レコードマネジメント(株)
http://www.tgn.or.jp/trm/

これから、俺たち、
どうすりゃいいんだ。
そうだ、ベルクへ行こう

コーヒー ¥210 生ビール ¥315

Beer & Cafe BERG

☎03-3226-1288
http://www.berg.jp

↑ベルク通信、全バックナンバー
がご覧になれます。

JR 新宿駅 東口改札出てすぐ
(ルミネエストB1)

POP 1 リベーション

この数年、販促ツールとして注目を集める手書きPOP。店頭で読んで「これ書いたひと、わかってる！」とニヤリとしたひとにとっては、自分と書店をつなぐツールとも言えます。だったらぼくも！ やってみたい！ そんなわけで、本誌のデザイナー奥定泰之さんとともに、書店を訪ねてPOPをつくってみました。

第一回は、あゆみブックス早稲田店。新書・コミック担当の佐々木夏紀さんが案内してくれました。まず目に付くのは、新刊・特集・フェアのコーナー。本の脇から、たくさんのPOPが生えています。手書きや新聞書評のコピー、出版社のつくる「手書きふうPOP」なんてものまで。それぞれ色使いや形に工夫が凝らされています。「担当者が棚をつくりながら書いてます。話題の新刊だけでなく、すでに動きがあるけれど“知る人ぞ知る”みたいなものを、もっとお知らせしようとPOPを書くことが多いです」と佐々木さん。

選んだのは、魚喃キリコ『ハルチン』、南Q太『オリベ』、高野文子『るきさん』。どれも女性を主人公にしたマンガです。3冊いっしょに並べる棚をつくるのだとか。今回初のPOPづくりという奥定さんも、「みつつあると、いろんな見せ方ができるよね」とアイデアを膨らませつつある様子。

さっそく打ち合わせに。「どれも一人暮らしをしている女のひとの話。みんなあんまりキチンとしてなくて、部屋も汚い(笑)。でも、毎日すごく楽しそうに暮らしてて。一人暮らしって、病気のときとか、そうでないときでも淋しくなるときってありますよね。このマンガには、そういうところも描かれているけど、そこも含めて楽しそうなんです。たしかに3作とも、どこにでもいそうな女性、それも女性同士の友情に焦点を当てたもの。「彼女たちと、ともだちになりたいって思うんです」。

奥定さん、ひらめいたようでラフを描きはじめる。「ひとつのPOPにしようか、みつつバラバラのにしようか迷ったのだけど決めた。“ともだちになりたい”みたいな言葉をみつつにまたがらせて、その下にそれぞれの作品の説明をつけるのはどうだろう？」

そう言って書き上がったのが右のラフ。「みつつも、タイトルが主人公の名前になってるから、主人公のひととなりを紹介するかたちでやるのはどう？」

佐々木さんも大賛成、彼女から見た主人公たちの魅力について語ってもらい、この日の打ち合わせは終了。あとは奥定さんの腕次第。

数日後、完成！（ページ右）各作品のカバーの色に合わせた3色POPは、かわいらしくもあるけれど甘すぎず。書かれた佐々木さんの言葉にも、芯のしっかりした意志の強さを感じます。みつつの吹き出しが立体的に重なり合うデザインの完成品は、あゆみブックス早稲田店で見るすることができます。ぜひ足を運んでみてください！

※完成品は、早稲田文学サイト上で公開します（8月中旬予定）。



く なる マン

る き さん

る き さん は メン メン し ない。
な ぜ な ら “ 快 道 さ ” は 自 分 で つ

も っ と 楽 し
オ リ ベ

無 理 に 笑 わ 不 い。 人 に 合 わ せ 不 い。
マ イ ベ ー ス で 淡 々 と 日 々 を 過 ぐ す オ リ ベ。
一 人 で い る こ と が 少 し

人 暮 ら し が
ハ ル チ ン

ハ ル チ ン に は チ ー チ ャ ン が い る。
ハ ル チ ン に は チ ー チ ャ ン が い る。

Final Dragon World 1

Library

ファイナルドラゴンライブラリー

ぼくは勇者に向いてない『孤島の鬼』編

「助かりたいのなら、これを読みなさい」
白い手が伸びてきて、本を手渡された。どういうことだ？
手の主は、少女だ。白い服を着ていて、その服よりも肌が白い。図書館の大きな窓からさし込んでくる光のせいで透明になりそうなほどの白い喉。

少女は棚の向こう側に立ち去る。本を探しにきたわけじゃない。少女から手渡された本を棚にもどす。少女はもういない。ドキドキしていることに気づく。興奮している？ いや、ちがう。胸が痛くなる。

気をそがれたので家に帰る。そして驚く。ぼくのトートバッグの中に本が入っている。

江戸川乱歩著『孤島の鬼』（創元推理文庫）
なんてことだ。彼女が、ぼくのバッグにこっそり入れたんだらうか？ これじゃ泥棒だ。

本を開いてみた。助かりたいのなら、という声がよくかえってきた。奇妙なカードがはさまっている。

江戸川乱歩。小学校の図書館で読んだことがある。少年探偵団、怪人二十面相、おもしろかったけどバカバカしいのもあった。

でも、これはちがった。少年探偵団がこども向けに書かれているとすれば、『孤島の鬼』は大人向けだ。

蓑浦金之助という男が語り手。恋人の木崎初代が殺される。密室殺人である。第二の殺人は、海水浴のビーチ。数百の群衆の中で、こどもと遊んでいた探偵が殺されてしまう。

ところが、この不可能犯罪の謎は、すぐに解明されてしまう。半分も読んでないのに、あっと驚く真相がわかってしまうのだ。残りはどうするんだろう？

ドキドキしながら読んでいたけど、冷静な自分も頭の別のところにおいて、小説を楽しんでいるのだと分析していた。でも、その後の奇怪な手記！ ここでやられてしまった。

小説を読んでいるぼくは消えて、描かれている世界とひとつになった。そんな体験は初めてだった。

“わたしは考えることができるようになってから、ずっと、何かしばりつけられているような、思うようにならない気持ちばかりしていました”

隠された真実があきらかになってくるにしたがって、ぼくは戦慄した。こんな本があって、いいのか。具体的には書けない。全体をまるごと読んでもらわないと誤解されそうだから。とても罪深い世界だから。

米光一成 Yonemitsu Kazunari

64年生。名作落ちゲー「ぶよぶよ」はじめ多数のゲームをつくるほか、小説をゲーム化しようとする『日本文学ふいんき語り』や、『仕事を100倍楽しくするプロジェクト攻略本』等、ゲームという視点から幅広い活動を見せる。
<http://blog.lv99.com/>

ナカシマカズユキ Nakashima Kazuyuki

67年生。作品によりまったく異なるテイストに描き分けるイラストレーター。以下のURLにはムチムチプリプリしたキャラクターたちが勢ぞろい。
<http://www.nk-w.jp/>

かたわ者という言葉が何度も出てくる。使ってはいけないと言われている言葉だ。差別用語だ。いや、描かれているものは、もっともっとグロテスクな世界。ゲームだったらすぐに発売禁止。いま、ここに書くこともためられる。こんな世界が、活字になって、ものすごい数の本になって、図書館や本屋に置いてある。世界が、わっと広がった気がした。世界というものをぼくはとても狭く想像していたことに気がついた。

推理小説のワクをはみだし、宝探し冒険モノになり、恐怖譚にも、ラブストーリーにも、世にも恐ろしい人間憎悪の物語にもなる。洞窟に閉じ込められるシーンを読みながら、ぼくは息苦しさを共有すると同時に、世界が開けて、ものすごく広い草原に立っているような感じも受け取っていた。

ページに黒いシミができた。わっ、なんだ。血だ。鼻血だ。ぼくは物語に興奮して鼻血を出してしまったのだ。胸が痛くなる。

黒いシミが大きく広がり、それは本のページからはみ出した。どういうことだ？ 椅子から転げ落ちる。黒いカヴァーの文庫本を落としてしまう。

シミは巨大化し、大きな穴になる。ひょいとその穴から出てきたのは、図書館で出会った透明な少女だった。

「ど、どういうこと!？」

「冒険に出るのよ」

すっと伸びた白い腕がぼくをつかまえ、引っぱり込まれた、穴に！



To be continued.

げきからぶんがくにゆうもん

第01回 『夏の水の半魚人』の魚彦

望月旬々 Mochizuki Shunjun

68年生。主として国内外の小説・演劇について「朝日新聞」「ボンツーン」等で望月旬名義の書評を手がける。著書に『日本文学にみる純愛百選 zero degree of 110 love sentences』（共著）。超がつくほどの辛い物好きで、職場にはカレー部があるとのウワサも。

きみがよく食べるカレーライス、辛口？
ぼくはといえば、激辛が大好きということでテレビ番組(TVチャンピオン2)に出演したこともあるんだけど、じつは、子どものころはカレーが苦手だった。

お子さま向けの味つけが、どうもダメで。
ふるまわれるたび、物心ついた小学生に甘口カレーなんて！と思っていた(生意気で、ごめんなさい)。「大人は判ってくれない」というか、なんか軽んじられてるような気持ちになったっけ。

だから、重松清さんの「カレーライス」という短編小説を読んだときには、そーなんだよなあと感じ入った。小学校の国語の教科書に載ってるから、読んだ人もいるかな。

あの小説では、小学生の息子に、父親が、「おまえ、もう『中辛』なのか？」と質問をする場面が印象的だった。その半信半疑ぶりに少年は一瞬うんざりするんだけど、「そうかそうか」とうれしそうに背いてくれた父親に、心を通わせる。

リアクションに困ってる大人を見て楽しむなんて、ほめられた趣味じゃないと思うし、それこそ子どもっぽい。だけど、次のような質問を大人に言わせることができたならば、やっぱり痛快だろう。

「おまえ、もう『激辛』なのか？」

だからこそ、面白くて、すこぶる刺激的な文学を味わってほしい。できるだけ、きみの友だちであってもよさげな登場人物(=子役キャラ)が出てくる作品を。しびれるような、読書体験をするために――。

というわけで、今回ご紹介するのは、前田司郎さんの『夏の水の半魚人』。今年の三島由紀夫賞を受賞した、少年小説の傑作だ。

SFアニメとか特撮映画みたいなタイトルだけど、冒頭からしてぶっとんでる。小学五年生の男子が主人公。名前は魚彦。なんでも、母親の初恋相手(魚のハマチ!)にちなんで名づけられたらしい。続いて、海子というこれまた変わった

名前の転校生が、あっと驚くような登場の仕方をする(美少女なのに！)。

この書き出しの空前絶後っぷり。その後に描かれてゆく小学五年生の日常生活が、子どもになじみぶかい小道具(誕生日会でもらう消しゴム、駄菓子屋で買うスーパーボール、神社の縁日で食べるアンズ飴……)ともどもリアルなだけに、なおさらすごい。

舞台は、東京の品川区にある五反田(辛いもの好きには、カレーたい焼きの名店「ダ・カーポ」がある町として有名!)。

さすが都会育ちの子は違うなあと感じさせられるのは、今からほぼ二〇年前の物語設定だけど、〈僕たちの学校ではほとんどの子供が私立を受ける〉らしく、魚彦も〈中学受験をするための塾に通っている〉ところかな。

でも、だれしものが、身につまされる思いをする作品だ(ついで、笑わされたりもする)。

教室で英雄を演じてみたり、あえて馬鹿のポジションに自分を置いたり、親友の特別な体験をねたましく思ったり……といった魚彦の気持ちからは、きっと、自分の中にある似たような感情が呼び起こされるはずだから。

きみがいま真剣に悩んでいることや切実な思いも、いずれ記憶の中に埋もれてしまう。そして思い出の「化石」は、きれいじゃないけど、かけがえのないものとして存在しつづけるだろう。それが「宝石」みたいに輝いて見えるようになるには、まだ、時間がかかるかもしれないけど。

〈切ないというのは、ちょっと泣きそうな気分に似ている〉という言葉から始まる、魚彦と海子による非日常的なラストシーンはまさに鳥肌もの。しかも、とつてもふしぎな読後感だ。どこまでもみずみずしく、どこからかやるせなく。

ちなみに魚彦の好物は、〈鶏肉でチーズを包んでアルミホイルを巻いて揚げたやつで、お母さんがなんかの本で見て作ってくれたやつだ。胡椒と塩の味がする〉とのこと。当然ながら、カレーは好き。それとエビチリも。

ということは、魚彦くんも、もう「中辛」なのかな。♪

仲正昌樹 **2好評**
〈学問〉の取扱説明書
仲正流〈学問〉のツボ!
哲学・思想、政治学、経済学、社会学、法学などの人文系諸学問について大学院生(9)と学部生(6)の質問に答える形で、**わかりやすく、かつエレガントに、学問のツボを押さえ**、さらには、学問をする上での勘違い、陥りやすい間違いを、一冊にまとめた**画期的入門書!** *1890円

作品社 東京都千代田区飯田橋2-7-4/ 郵便税込
TEL.03(3262)9753 FAX.03(3262)9757

野村胡堂 **野村胡堂** **野村胡堂**
伝奇幻想小説
集成
『銭形平次』の生みの親による、**入手困難の幻想譚・伝奇小説を集成!**
事件、陰謀、推理、怪奇、妖異、活劇、恋愛……昭和日本を代表するエンタテインメント文芸の精髄。未収録品も収録 *1740円

野村胡堂探偵小説全集 [全18巻]
小説23作、評論エッセイ・発言11作所収。名探偵・花房一郎、21世紀に華麗に復活!
▼限定1000部 *1740円

三田誠広
影の主役、好色なエゴイストはなぜ自殺するのか?
これまでの作家論作品を咀嚼しつつ謎多き名作の主題と構造を見事に脱構築し、原作以上の興奮と感動をもたらす渾身の書下ろし小説900枚! 小説によるトランスエッセイ論第一弾! *2520円

三田誠広
『罪と罰』

新釈
罪と罰
スワイドリガイロラの死
●謎多き名作を脱構築し再小説化する新しい試み●

未来の読書と ランデブー

新城カズマ

Sinjow Kazuma

生年不詳。無類のSF好き高校生の青春小説『サマー/タイム/トラベラー』をはじめ多くの著作もちつつ、『ライトノベル』『超』『入門』『物語工学論』等の評論も手がける。2008年からはじめたブログ「散歩男爵」(http://d.hatena.ne.jp/sinjowkazuma/)「twitter」(https://twitter.com/SinjowKazuma)も鋭意更新中。

第01回◎未来の図書館と話してみた
ONE-PP01

ストーリーからこぼれる
会話が人生を作るのだ。



人と人の淡いつながりを絶妙に描き出す注目の作家、最新作!

山崎ナオコーラ

ここに消えない

会話がある

最新刊・発売中●定価1,155円(税込) 撮影/集田大輔

先に続く仕事や、実りのある恋だけが、人間を成熟へと向かわせるわけではない。友だちでも、恋人でもない、職場の同僚たちと交わす何気ない日常の会話とかげがえのないやりとりを描く。キラキラ輝く会話がある職場小説。



集英社

〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

— 某月某日、都内の某ファミレスにて —

新城「(ケータイを耳にあてがって) あどうも、おひさしぶりです。……なるほど。〈WB〉誌上でエッセイを。お題は……これからの読書。おお、いいですね。本を読むとはどういうことなのか、書物や図書館はどんな風になるのか……ちょうど僕も、例のグーグル・ブック検索問題についてブログで書いてますし。ぜひやらせてください。ええ、ちゃんとメタ守ります。ではよろしく〜。(ケータイを置いて) とは言ったものの、この短い枚数で、今後数年から十数年に起きる大激動の予測をどう伝えるべきか……それこそ、この文章を目にするだろう中高生のみなさんが社会に出て働き始める頃には、書物や読書に関する全てが様変わりしている可能性は非常に大きいわけで。なんとも責任重大だなあ……ああ、こういう時に、未来の図書館を呼び出せて話を直接聞かせてもらえれば、便利なんだが」

L「ども。未来の図書館です」

新「うわあああホントに出たあ！」

L「まあまあ(と、新城のジュースを勝手に飲みながら) これくらいで驚いては笑われますよ。未来の図書館は、単に本が置いてある静かな場所じゃないのです。あらゆる場所へとつながる入場ゲートにして、膨大な情報を送り出す巨大複合知性ネットワークなのですからして」

新「(必死に冷静を保ちつつ) そ、それは興味深い。てことはテレビやインターネットと完全に融合しちゃったの？」

L「いや、そんな単純なことではないのです。すでにあなたの時代でも、そのケータイで書物を読めるでしょ。書物は、電気をつかって読んだりダウンロードしたりする……つまりショモツへと変わりつつあるわけですよ」

新「ショモツ？」

L「そうですね。軽くて、持ち運びに便利で、無数のコピーが一瞬でつくれる、しかも電子的なメモを貼りつけたり、検索できたり、別のバージョンを生み出したり、他のショモツへとリンクしたり、お互いの内容をこまかく較べ合せて今までは気づきもしなかった因果関係や影響関係を新たに見つけたり、たくさんのショモツを組み合わせ混ぜ合わせることで新しい〈子供ショモツ〉や〈孫ショモツ〉が生まれたり……ちなみにショモツに限らず、自動車も動力源が油から電気によってジドウシャになってますし、住宅もどんどん電化してジュウタクになりました。放送もホウソウになり、さらにキョウイクとかリョコウとかドウブツとかウジョウとか」

新「わかったぞ。つまり、電気動くものはお互いに区別がつかなくなるんだな。そして電気で制御できるなら、電子的に情報を発信・集計・比較するのも簡単だ。ということは……」

L「そう！ あらゆるモノが発言し、あらゆる発言はショモツでもあり、あらゆるショモツは環境になったのです！ 本は読心ではなく、ジョイスティックを使って中に入るものなのです。なぜって、あらゆる品物が情報を生み出しているなら、それはもうショモツだし、ショモツを自由に書き加えたり改善したりできるなら、それは環境そのものですから。」

そして図書館こそは、それらすべての環境につながる万能の扉として生まれ変わりました。世界中のあらゆる場所へ……異世界へ……過去と未来へ……ヒトのココロが思い描くあらゆるセカイへ通じる入り口です！ もちろん、例のグーグル問題も含めて、長い議論や法律を変えるための努力がありました。でも、グーグルの中の人にしても書店や図書館の中の人にしても、みんなにもっと本を読んで欲しいという願いは同じでしたから。

僕たち未来の図書館の標語、知ってます？——「いかなるショモツとて孤島ではない No Book Is An Island」というんですよ」

新「ジョン・ダンの詩の一節をもじったんだね。人は孤島にあらず……ゆえに問うなかれ、誰がために、かの甲鐘は鳴れりと……それは我がために、また汝がために鳴るなれば」

L「ええ。(胸をはって) 僕たち図書館もまた孤島ではなく、世界にあまねく広がる、壮大なトショカンの一部なのです！ どうです、すごいでしょ。すごいって言ってください。うふふ」

新「……いやまあ、その、ふむなるほど。そうだ、このエッセイでは毎回おすすめの本を紹介しようと思ってたんだが、ちょうど話題にも合ってるし、今回はあれにしよう」

『華氏 451度』

レイ・ブラッドベリ (早川書房)



L「っていきなり〈本が読めなくなってる世界の物語〉じゃないですか！ 読書の未来は明るい、が今回の結論でしょ!!」

新「まあまあまあ。ちなみに『華氏〜』は本が読めないんじゃないかって、本を読まなくなってる世界の物語だよ」

L「どう違うんですか！」

新「詳しくは読んでもらうとして……とにかく、未来は単なるバラ色じゃないってことさ。たとえば——」(店内の電気が急に消える：そばにいたウェイトレスが天井を見上げて)

ウェ「あら停電だね。珍しいわね、最近こんな……あらっ！ もしもし!? お客さま、お連れの方が急にグタリしてますけど！」

新「——たとえば、こんなこともあり得るわけだ。他にもいろんな悪い可能性は考えられるが、それはまた次回以降に。なんにせよ、あんまり一つの力に頼りすぎるのは考えものだよ……」

(と、ポケットから『華氏〜』の文庫本を取り出してマッチの灯りで読み始める——)

今月のウチのオススメ

『レッツ・すぴーく・English』

伊藤比呂美

授業の英語に飽きたら。

『死の棘』

島尾敏雄

カテイノジジョウに
悩む君に。

『わが悲しき 娼婦たちの思い出』

ガブリエル・ガルシア＝マルケス

少年よ、エロ本でヌイてる
場合ではない。

『フーコーの振り子』

ウンベルト・エーコ

『ダ・ヴィンチ・コード』を
読むならこっちを読むべし。

あなたの「オススメ」をつくりませんか？

①オリジナルWBをつくって配布！

→上記「今月のウチのオススメ」には、早稲田文学のオススメを仮に掲載していますが、早稲田文学編集室サイトからダウンロードした専用シート（PDFおよびWordデータ）をプリントアウト→記入・入力→切り取り→貼り付けて、みなさんの「オススメ」を作っていただけるようになっていきます。

「WB」を設置して下さっている図書館・書店・カフェ等のみなさん、お友達に手渡して下さっている読者の方々、オリジナルの「WB」を作ってみませんか？もちろん、これから配布を始めていただける方々も、大歓迎です。

②本を紹介してくれる司書さん・図書館員さん、大募集！

→左ページの「教えて！ 図書館だより」欄で書籍を紹介して下さる、図書館関係者の方を募集しています。ご応募いただいたなかから毎月1名の方の「オススメ」を、カラーで紹介させていただきます。紹介したい本を5冊と、それぞれに10～20字程度のコメントをお寄せください（紹介させていただく方には別途、1000字程度の紹介文をお願いする場合があります）。

ご応募いただける方は、氏名・住所・電話番号・メールアドレス・所属施設名を添えて、p.7記載の送付先まで、メール・郵便・FAX等でお送りください。

扶桑社の文芸単行本

夏の水の半魚人
前田司郎 著
■定価1,680円(税込)
三島由紀夫賞受賞

角川春樹句会手帖
佐藤和歌子 著
■定価1,680円(税込)
最強俳句入門

センチメンタルな、大人の料理&エッセイ
架空の料理 空想の食卓
リリー・フランキー 著
澤口知之 著 ■定価1,890円(税込)

◆7月下旬刊行予定
倶楽部亀坪 亀和田武&坪内祐三 著
◆8月上旬刊行予定
文学の器——現代作家と語る昭和文学の光芒
坂本忠雄 著

超世代文芸クオリティマガジン

en-taxi

ODAIBA MOOK No.26 SUMMER 2009
エンタクシー 26号
A4変型判 定価980円(税込)

責任編集
福田和也
坪内祐三
リリー・フランキー

好評発売中

江藤淳没後十年、批評家の明滅、批評家の命脈

特集
石原慎太郎／白川浩司／坂本忠雄
前田豊／山田潤治／佐藤和歌子 ほか

「願わくは鳩のごとくに」六十過ぎの子育て記
中原景「ミルクィウエイ」前編
佐伯二麦「髭の声」前編
坪内祐三「九八四と二〇八四」
岡林信康その誠実と変革する時代
三島賞受賞記念「前田司郎資料館」
大竹伸朗、熱烈制作中！
直島銭湯「I♡湯」
新連載「津村記久子のえいがてくてく」
南博／小野耕世／東信／大鶴義丹／平山夢明
秋山祐徳太子／吉田篤弘／立川談志
杉作J太郎／小池昌代&角川春樹 ほか

小説
演出家 杉田成道 自伝小説
「願わくは鳩のごとくに」
六十過ぎの子育て記
中原景「ミルクィウエイ」前編
佐伯二麦「髭の声」前編
坪内祐三「九八四と二〇八四」
岡林信康その誠実と変革する時代
三島賞受賞記念「前田司郎資料館」
大竹伸朗、熱烈制作中！
直島銭湯「I♡湯」
新連載「津村記久子のえいがてくてく」
南博／小野耕世／東信／大鶴義丹／平山夢明
秋山祐徳太子／吉田篤弘／立川談志
杉作J太郎／小池昌代&角川春樹 ほか

「地下街回遊スケッチ」
泉麻人／南陀楼綾繁／平松剛／枝川公二
甲斐みのり／橋本倫史 ほか

◆エンタクシー バックナンバー◆
書店でご注文いただけます。各号の内容等は、本誌、または扶桑社ホームページでご確認ください。

◆エンタクシー バックナンバー◆
書店でご注文いただけます。各号の内容等は、本誌、または扶桑社ホームページでご確認ください。

教えて!

図書館だより

日本はもちろん世界各地の図書館ではたらく人たちがイチオシの本を紹介!



『ここが家だ』

ベン・シャーン+アーサー・ビナード
歴史的事件描く力強い絵本。



『止島』

小川国夫
思春期の揺らぎを鮮やかに。



『単純な脳、 複雑な「私」』

池谷裕二
「心」って何?



『この世でいちばん 大事な「カネ」の話』

西原理恵子
働くことが、生きること。



『体の贈り物』

レベッカ・ブラウン
人生は愛おしい。

静岡県立藤枝東高校・司書教諭

増田康子さん

こんにちは。静岡県立藤枝東高校で司書教諭をやっています増田康子と申します。

何をどう間違ったのか、今回の欄を書く羽目になってしまいました。これも運命。はあ、しょんないで(仕方ないので)、ちいーっと書かっかやあ(焼津弁)。

まず一冊目は学区の焼津が舞台『ここが家だ』。地元の歴史的事件にもかかわらず、第五福竜丸を生徒はあまり知りません。ですが、わたしたちは久保山愛吉さんとあの事件を忘れてはならないはず。それは「あたらしい 原水爆を つくって いつか つかおうと かんがえる ひとたち」がいるからで、「わすれたところに またドドーン! みんなの 家に 放射能の 雨がふる」(本文より) ことになりかねないから。リトアニア出身でアメリカ合衆国で活躍した画家ベン・シャーンの「ラッキー・ドラゴン・シリーズ」の絵に、詩人アーサー・ビナードが言葉をつけて構成した力強い絵本です。

次はウチの学校出身の作家・小川国夫。四月が一周年忌でしたので、遺作短編集『止島』を。戦前の藤枝近辺が舞台。中でも作者を投影させた主人公の少年と、彼の祖父がよく利用していた人力車の車夫の孫である同級生の少女との交流を描いた連作は、思春期にさしかかった年代の揺らぎがよくあらわれて、方言とともに心にゆっくりしみこんでいきます。学校すぐ近くにお住まいで完全夜型の氏は、放課後の時間に目覚めて近所を散策するのが日課でした。その姿はよく言えば吟遊詩人、わるく言えば、やっぱり言えない……。かつては

「オレ昨日、小川国夫見たぜ」という生徒の会話がよく聞けたものです。合掌。

次は、若くして大活躍のOB、池谷裕二氏の『単純な脳、複雑な「私」』。母校で行った講演と連続講義を収録したもの。全校向け講演では生徒の興味を引きそうな話題(手で理系か文系かわかる等)から入り、自分の「行動」や「意味」を脳が早とちりして勘違いな理由付けをする「錯誤帰属」や、恋愛中の人はテグメンタ(腹側被蓋野)という脳の部位が活動するなど、「脳」をわかりやすく説明。そのため連続講義の希望者が予定を上回り、教員は参加不可。本になってやっと講義内容がわかりました。内容は高度になったけれど、そのぶん知的刺激満載。自分の心を自分の心で考えるとき、脳のワーキングメモリ容量には限界があるから、それが飽和してヒトは理解不能の不安状態に陥ってしまう。だから、脳の作動そのものは単純なのに、そこから生まれた「私」は複雑な心を持っているように見える……というのがタイトルの由来。最先端の科学をこうやってアウトリーチしてくれる筆者に感謝。

次の二冊は、私の大好きなお二人の作品。

今が一番儲かってそうな西原理恵子の『この世で一番大事な「カネ」の話』。りえぞお先生愛読者としては「あのネタはこの体験がモトなのね」的な、でもホントに大変だったんだなあと思わせる話の連続。特にいいのはあとがきで、「人が人であることをやめないために、人は働くんだよ。働くことが、生きることなんだよ。どうか、それをわすれないで」。きっと自分の子どもたちに向



けて言ってんだろうなあ、と思った途端、涙出ます。「よりみちパン!セ」シリーズ読んで泣いたのは初めてです。そういえば『ぼくち』もラスト一頁で大泣きしたなあ。

ラストは来日記念、レベッカ・ブラウンの『体の贈り物』。柴田元幸氏の翻訳モノはほぼハズレがありませんが、中でも特に素晴らしい一冊です。エイズ末期患者のケア・ワーカーを務める女性が出会い、しかしやがて亡くなっていく人々。彼らの体に必ず触れる介護者。肌のぬくもり、小さくなった背中……言葉以上にその人の思いが伝わっていく場。それぞれの人生が抱えているものや、失われていくものたちを静かな筆致で描き、読む者に深い感動を与えます。人生は愛おしい、そう思わせてくれる本です。

★

西原 でも小学校四年生くらいにもなると、名画座行きははじめちゃったんですよ。六〇〇円で三本立て。

重松 漁師町って、バツとお金をはいるひが多いから、意外と映画館が多いっていうよね。

西原 そうそう。でも冴えない、一回もピントが合ったことない映画館。あそこで『ゲシュタポナチ女収容所』三部作みたいなタイトルの映画も観ました(爆笑)。お父さんが戦争モノだと思って、間違えて入っちゃった。あと、仲良しの子でオカマがいたんですよ。すごいじめられた子で、小学二年生……。

重松 子供のころからオカマだったの？

西原 ガチホモ！(笑)で、高知県でガチオカマだから、ものすごいじめられてたのね。ほんとにオネエで、叩かれても「やめてよ〜ん」って、こういうポーズで(笑)。その子が「名画座行こう」って連れて行ってきて、たしか『真夜中のカーボーイ』と『狼たちの午後』だったんですよ。それがすごくかっこよかったのを覚えていますね。「ままならないまま」を撮ってる感じが。文学でもマンガでもその「ままならないもの」が大好きで……。

重松 身もフタもなく現実がドーン！ とくる感じ？ でも、洋画が来るってわりとハイカラな町じゃない？

西原 すごい昔のリメイクしたやつとかですよ。

重松 それでも、みんな字幕を見る集中力があるってことだからさ(笑)。

西原 なるほど(笑)。

重松 おれがはじめて観た映画は、八代亜紀の「しのび恋」っていう曲を映画にしたやつ。昔、演歌のヒット曲にストーリーをつけたやつがよくあったんだよ。『山口組三代目』との併映で(笑)、そんなのばっかりだった。だから最初に観た洋画は、『タワーリング・インフェルノ』かな(笑)。

西原 「ままならぬ」っていうか、大炎上じゃないですかそれ(笑)。

重松 そうそう(笑)。でもやっぱり、映画館があつてよかったね、それ思うと。

西原 高校生までずっと通ってましたね。『カリギュラ』観たのもそこだったなあ(笑)。なんでも一緒にたにやっちゃうの。18禁でも、ユルいから高校生を平気で入れてくれたし。ポルノはポルノでべつにあるんですけどね。

重松 映画少女だったんだ。

西原 たぶん勉強がとてもできなかったのと、女子高だったからだと思う。女の子って、すごいつまらないんですよ。男の子はすごいバカだけとさ、女は女で、一時間目から六時間目まで髪型の話とか洋服の話ばかりするんですよ。あと彼氏の話とか。はげしくつまらなかった

ですね。だから都会に来て、ひとと話が合うことが、ほんと楽しかったです。田舎の女の子の退屈さっていったら、もうほんとに……。

★

重松 大学生と中学生になったウチの娘たちを見てても思うけど、女の子って、持って生まれたたくましさがあるんだよね。さっきの話に出てた「空気を読む」力に加えて、「居場所を見つける力」も男の子よりあると思う。男の子には天然ではない機能で、それこそチップをどっかに植えつけないきゃいけない感じ。あれって、なにが植えつけるんだろう？ 西原さんのお兄ちゃんは、どうやって居場所をつくったの？

西原 お兄ちゃんとはすごく仲悪かったからなあ(笑)。……居場所じゃないかもしれないけど、男のひとは、お金払って他人の釜の飯食って他人の男に怒られること、がすごい大事じゃないかって、いつも思ってます。

重松 怒られることが？

西原 うん。ママの愚痴とか説教聞いていい子になっちゃったら、それ



こそ怖いじゃないですか。それより、体育会系とか武士道の精神とか、上の男のひとにキチンと叱ってもらったり、寮みたいなところで集団で生活しないと、周りの空気読む訓練が積めないんじゃないですかね。「先輩になんかやったらエライことになる」っていう訓練……。

重松 かつては極道の仕事でもあったんだよね。役目というか、行儀作法教えてやる、みたいなものが。若衆宿とか、ふるさとの青年団とか、男同士の「兄貴分」みたいなのは、高知にあったんですか？「祭りの神輿担げたら一人前」みたいなのは？

西原 「ヤクザと警官にベコベコしてるところを見られたら、男として終わり」ってのはありましたよ。うちの父親も商売やってただけけど、やっぱり組のひとが来るんです。そしたら事務所にイキナリ電話して「お前の若いモンがナントカ言ってきたらわ！ どういうことだ！」って。

重松 すごいねえ。

西原 どんなにチビってても、ヤクザと警官にベコベコしちゃいけないんですよ。だからいまでもわたしのなかで、そういうひとにベコベコする人間は、ひとじゃないっていうか、男じゃないっていうのはすごいありますよね。だから、好きなひとはだいたい前科モノ(笑)。在日の男のひとも大好きですね。プライオリティがしっかりしてるでしょう？ いちばん大事なのが家族で、次が仕事って。「家族を守るために、おれはなんでもする」っていう。逆に、「決まりだから」とか「表に出たら大変だから」とかって言うひとは、もうほんとに大嫌いだ。税金は表に出さないようにしていますが(笑)。

重松 あいかわらず？

西原 国家という泥棒に対して隙を見せぬように闘ってます。もしも前科が来たら、巻頭カラーもらおうつもりだし——「前科一犯記念マンガ」(笑)。

重松 そういうお母ちゃんの闘いを、娘さんと息子さんはどう見てるの？

西原 「また「金、金」って言ってるよ！」みたいな。

重松 娘さんのほう？

西原 両方。で、「お金より大事なものがあつてしょ！」って言われる。

重松 子供に教わってたんだ！ ひとの道を!!

西原 ううん、「ねえよ」って返事してる(爆笑)。でも、息子は十一歳、娘は九歳で、ふたりともわたしの機嫌をとって十一年と九年のプロですから、わたしの機嫌をとることの一番うまいひとたちです。どうすれば家のなかうまく回るかを知ってる。

重松 猫じゃないけど、「この家で一番偉いひとと、どうつき合うか？」。

西原 わたしの嫌がるようなこととかムツとするようなこと、ぜったい言わないでもん。わたしの言うことは全肯定でいてくれる。こんなにかわいくて、こんなふうに言ってくれていいのかって思いますよね。そのぶん、外では相当やっているんだろうな、と思いつつ(笑)。

重松 女の子が九歳だったら、あと一、二年で思春期入っちゃうわけじゃない？ そのへんのポジション取りが変わってくるかもって予感はある？

西原 どうでしょう。でも、どんなになっちゃっても家族ですから、アル中になっても癌になっても、彼(=鴨志田稷さん、故人)との態度は変わらなかったし。そんなことで変わることはありえない。足がなくなったって、頭おかしくなったってね。よく周りのお母さんに、「西原さん、ほんとに子供怒らないね、なんで？」って言われるけど、家のなかでアル中が暴れてたんで、こんなもんかわいいもんすよ(笑)。家のなかでウソコしたって怒らない。お父さんが自分のウソコ投げたりしてたんだから。「なんでハンカチ持ってないのよ」って怒ってるお母さん見ると、「レベルの高いこと言ってるなあ」と思います(笑)。

※サイバラ+シゲマツ対談、熱い展開に。怒濤の完全版を「早稲田文学3——特集コドモと文学」に掲載決定！

西原 このあいだ、マカオに博打に行ったんですけど、ドーム何個分ぐらいのでっかいホテルでね、部屋もスイートで200㎡近くある。で、その下が地下二階まである巨大カジノで、中に川まで流れて。アメリカの資本で、あの巨大なラスベガスより、さらにすごいんですよ。

重松 マカオはまだ景気いいの？

西原 ううん、それがね、去年のリーマン・ブラザーズやらなにやらの金融危機で、全部中止になっちゃったの。「こんなすごい資本が見切り発車してたんだ」と思ったら、すごいですよ。地球がいっぺんにビタッと一瞬止まっちゃってるもん。マカオじゅうが巨大ホテルの建設ラッシュでクレーンどっさりあったんだけど、あれが全部止まって。

重松 ドバイみたいだね。いっぺんにみんな引き上げちゃう。

西原 ドバイもすごいですよ。こないだ行ったひとに聞いたんですが、飛行場に高級車がたくさん乗り捨てられてるんですよ。みんな逃げただって(笑)。

重松 そのまま逃げてるの、身ひとつで逃げたんだよ(笑)。すごい時代になっちゃったねえ。

西原 ドバイのひとなんて、地球を何回も買えるぶんのお金突っ込んだのに、それがなくなるってどういうことなんでしょうね。でも、マカオのお客さんも同じでね、張りかたが普通じゃないんですよ。中国人はもともとギャンブル大好きなんだけど、身なりと格好、髪型とか手の荒れかた見るとそんなお金を張れるはずないひとたちが、「ブラックジャック」や「大小」で、すごい額を張ってるんです。一年の年収じゃ到底きかないくらい。聞いたら、大陸からのお客の飛び降りも相当すごくて……。

重松 命張ってるのね(笑)。しかも、その命があんまり高くない……。

西原 そのせいで本土からのマカオツアーが制限されたって、前に週刊誌で読んだことがあったんですよ。あんまり自殺とかいろいろすごくて。一秒で青天井だから。

重松 でも、映画も博打だよ。『いけちゃん』と『ぼく』、どうですか？

西原 成績は……ちょっと心配ですけどね。あちこちで言ってるんだけど、大事なオチを最初から話しちゃってるし(笑)。「どうして？」って聞いたら『「余命1ヶ月の花嫁」に客がバカバカ入っちゃってるから、自分たちも』だって。「タイトル見たら内容わかるんだからもう観なくていいじゃん」って思うんだけど、それが「置いてかない大事さ」なんですよ。テレビとかも「置いてかないこと」をものすごい大事にしてるでしょう？ 下にテロップ流したりして、『シックス・センス』で最初に「このひとと死んでるよ」って教えてるようなもんじゃん、とか思うけど(笑)。

★

重松 息子さんくらいの男の子が主人公ですよ。反応は？

西原 連載のときから「いけちゃん！ いけちゃん！」ってすごい喜んで、刷り出しなんか喜んで見てくれました。でも、最後のほうは主人公がオトナになるんで、ぜんぜんわかんないみたい(笑)。

重松 娘さんのほうは？

西原 「お兄ちゃんのキャラで絵本にしたんだから、次はわたし」って。なんか『きらりん☆レボリューション』みたいなのがいいらしいです(笑)。

重松 いけちゃんみたいな友達は彼女にもいるの？

西原 男の子にしかいない。女の子はそんなイマジナリー・フレンドと遊ぶようなタマじゃないから。そんなことしてもどうにもならないって知ってるんですよ。夫婦が仲悪いときにはちゃんとパパのおひざに乗って「ママのことを言って」とか、「状況よくしよう」ってことがもう0歳からできるもん。男の子ってそんなことできないでしょう？ まずは空気悪くしちゃう(笑)。

重松 ぼうっとして(笑)。結局、女の子のほうが、自分のポジション取りがうまいよね。

西原 前から言ってるけど、「女は地図読めないけど空気読める」ですからね(笑)。男のひとが空気読まないってのは、息子を見てよくわかったんですよ。「ああそうか、最初から付いてるんじゃなくて、NECと

かで買ってきて付けなきゃいけないものなんだ」って。

重松 「空気読みチップ」みたいなものを(笑)。『毎日かあさん』で、息子さんの読書感想文が「長い」って一言で(笑)、いまだに忘れられないんだよね。あれから少しは……。

西原 まったく変わらない。感想文も、あとがきとかだけ読んでちゃっちゃっちゃーとやったりとか、「ナントかって思いました、ナントかって思いました、ナントかって思いました」ってのをひたすら書いて、二ページ目の最初の一行で止めて終わりにしたり。

重松 ギリギリ指定枚数に足りるくらい？

西原 そうそう。息子は本読むの、大嫌いですね。

重松 読ませようとしてる？

西原 嫌なものやらしても、ねえ。だいたい、まず机の前に座れないんだもん。そういう子を無理やり座らして読ましたって、アタマに入らないから無理ですよ。大人になって読んでくれればいいとは思いますがね。

★

重松 西原さん自身は小学生時代、どうでしたか？

西原 本読むの、すごい好きでした。でも、児童文学は大嫌いで。「努力すれば報われる」とか「こんな偉いひとは小さいころこんなに立派なことをした」とか、そういうやつ。『十五少年漂流記』読んだときとか、そもそも家の状況が、親が数万円で殴りあったりとか、となりは夜逃げしたり子供が殴られたりだったから、「うちのほうがぜんぜん漂流してるじゃん」って(笑)。

重松 ロビンソン・クルーソーよりずっと、と。

西原 あいつなんか召使までいるじゃん、もう

腹が立って腹が立って(笑)。いわさきち

ひろも大嫌いでした。わたしの周りには、

いわさきちひろが描くような子供

なんてひとりもいなかった。だから、

「あのひとたち、ぜったい嘘ついてる。

こんなかわいくてやさしくていい子

いないもん」と。

重松 水彩画で色が滲むタイプの町じ

ゃないもんね(笑)。

西原 失敗した鉄の焼けたニオイしかしい

(笑)。あれが小便のニオイとよく似てるのよ、嫌

なニオイで。

重松 児童文学じゃない本って、どんなの読んでましたか？

西原 母親が図書館で毎回借りてきてくれるんですよ。それと、学校の図書館。あと、うちには妙なエロ本があって……『週刊新潮』の「黒い報告書」(笑)。わたしの性の目覚めです。だから、岩井志麻さんがこないだ「理恵子」っての出してくれて(「黒い報告書 電子版 「センチの神様」を怒らせた「ニートの王様」)、首絞められて死ぬ役をやらされてすごい嬉しかったの(笑)。

重松 子供のころはそういうの、親に黙ってこっそり読んでたの？

西原 うん。都会のひとって音楽を聴くのも、映画を観るのも絵を描くのもみんなできるけど、田舎のひとにとって本を読むのは特別の趣味なんです。釣りするのと同じで、「いい趣味、おもしろい趣味をお持ちですよ……」って。

重松 ぜんぜん別個のものなんだよね、生活とは。

西原 うちはその趣味を持ち合わせているひとはなくて。とにかくすごく嫌な家庭環境のなかで母親が、「あんたたちのために我慢してやってんの」って。本以外にも、「ピアノならろてきなさい、ピアノなら情操つくから」ゆうて、父親のこと罵りながら。

重松 情操(笑)。

西原 コンビニでたぶん三〇〇円で売ってるって思ってる(笑)。あのひとにとって子供にピアノを習わせることと、本を読ませることは「わたしこれでも子供の情操教育してるの」ってエクスキューズだったみたいです。



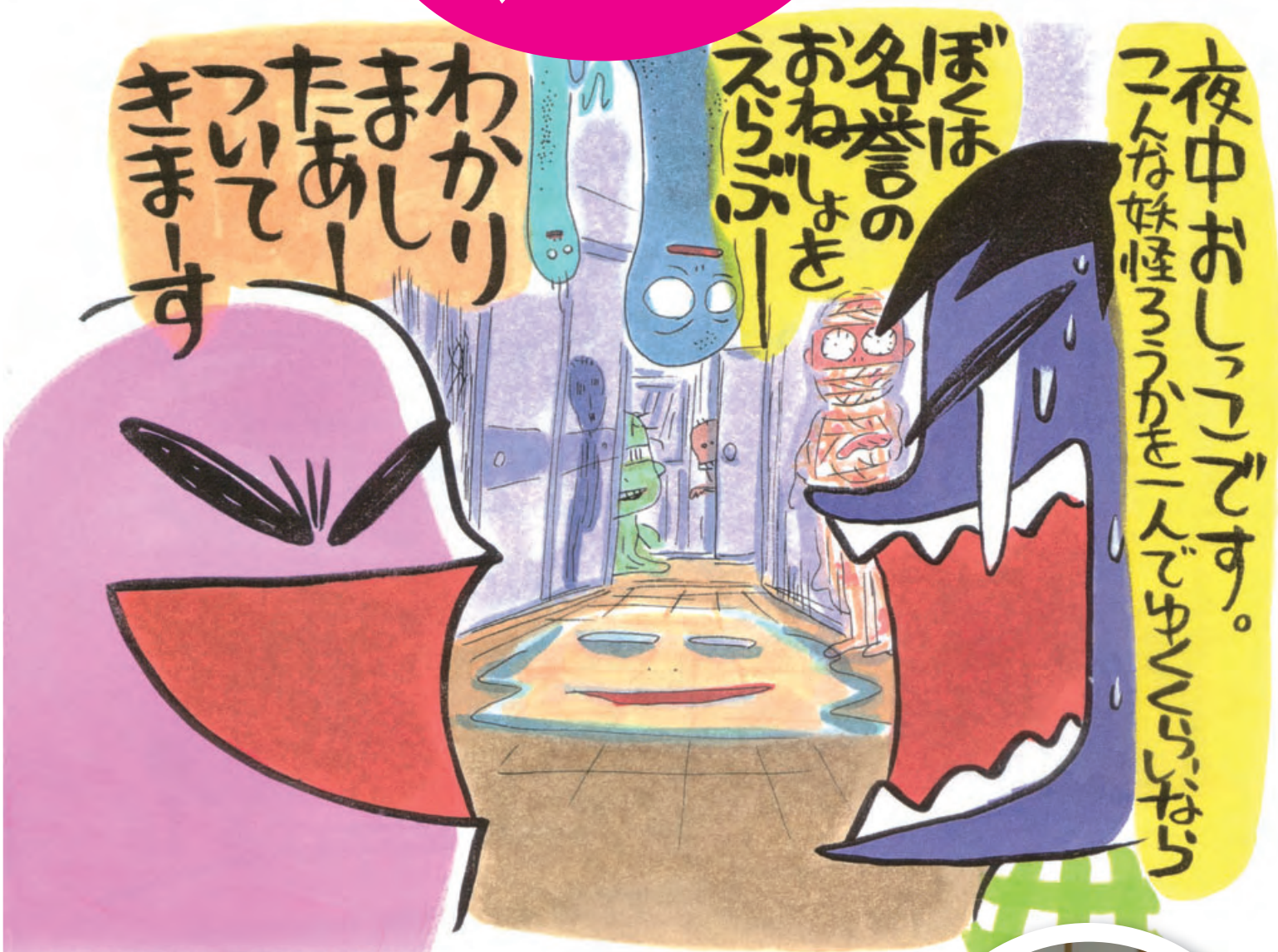
西原理恵子+重松清
新城カズマ
望月旬々
米光一成+ナカシマカズキ
斎藤美奈子
モブ・ノリオ
nanakikae
東浩紀
村田沙耶香

WASEDA bungaku FreePaper
vol.017_2009_summer

楽しい文学
Wonderful BUNGAU

¥0

こども WB



西原理恵子+重松清

「男の子って なんてバカ」

